

十一月九日

朝、山口さんに連絡。原稿送る。

午前中、研究室に出掛けなくてはと思っている最中に、山口先生よりFAXの返信が届く。予想通り大きなスレ違いを露呈しはじめた。どんなスレ違いか。コレが仲々面白いのだ。私が考えたのは、山口勝弘、七十七才になって、身体が不自由になり、そうした人間の更なる自由って事だ。

身体壮健の頃の山口さん、つまり倒れる前の山口さんは、典型的な日本のエリート芸術家だった。啓蒙家でもあり学者で制作も続けるインテリゲンチャンでもあった。

その山口さんがアカデミーの俗にもまみれず、孤高であり続けたのは、日本の、移入され続けたそれこそモダンアートの底の浅さ故でもあった。

建築家の世界と酷似している。

山口勝弘のそうしたモダンアートの渦中のキャリアの中での到達点が「ヴィトリリーヌ」だった。命名は瀧口修造である。

「ヴィトリリーヌ」は確かに優等生的作品としてはマウント穂高岳位に凄いものだ。要するにその物体を視る人間の位置の変化によって、物体が変化して見えるって事を、物体を介して示した。

精緻な制作能力、すなわちディテールへのこだわりがそれを支え抜いた。私も実見して、これは見事だと実感した。マテリアルの選び方、組み合わせ方にクラフトマンシップが溢れていた。

しかし、世阿弥の能の道具である能面の無表情、静止と比較したらどうなのか、解らぬなとも考えた。新しい素材、新しい先端的な技術的イメージを借用している考えの寿命はそれ程長くないのではとも思ったのだ。

山口さんは理の人であり、知の人であつたから、自然に相対的思考を身につけた。何が新しく、何がもう古いかを良くかきわける事が自然にできるのだ。それが山口さんを支えたのだが、正直何か物足りぬモノがあつた。アートは教養の総合なのかの疑問と同じである。もしも、現代に於いてもアーティストという者が、アスベスト公害と歴然と異なる意味を持って立ち現れるとしたならば、それは何を精神のフトコロにしまい込んでいるからなのか。それが知りたいのである。

要するに、倒れて体が不自由になってからの山口勝弘は本物であり、それ以前は、どうなのかって事を考えているわけだ。時間が無いので、今はこれ位にしておく。

昼、新宿で渡辺君と打合わせ。その後、永田町、霞ヶ関界わいを徘徊する。二〇時過、世田谷村に戻る。